

香川県におけるガラス室ブドウ園土壌の理化学性について

真鍋武夫・大熊正寛・安藤奨・原田豊

香川県におけるガラス室ブドウ園土壌の理化学性を調査し、下記の結果を得た。

1. 開園年次の相違にかかわらず、土壌の物理性の差は僅少であった。古い園は新しい園に比較して、表層土が微アルカリ性反応を呈し、有効態 P_2O_5 や塩基、あるいは NO_3-N の多量集積がみられ、EC が 1.0mS 以上の値をしめた。集積量は $CaO > MgO > K_2O > P_2O_5 > NO_3-N$ の順位に多く、表層下 10cm までの深さにもっとも多くて、以下の層になるにしたがって減少の傾向であった。
2. ガラス室で、施肥障害のために施肥が行なわれていない園と、施肥が行なわれている園の土壌について、塩類集積状況を比較検討した結果、前者は後者に比較して EC が 2.50mS にも達し、明らかに濃度障害の危険性が認められた。
3. ガラス室はハウスに比較して、表層土が微アルカリ性で、腐植が少なく、有効態 P_2O_5 や CaO 、 NO_3-N が著しく多量に集積し、そのため EC が 1.43mS の値をしめた。